題字 千田是也
新劇の代表的演出家・千田是也氏の文字をロゴデザインに使用。（資料提供／早稲田大学坪内博士記念演劇博物館）

D

2019. May.
第22号
一般社団法人日本演出者協会
協会誌「ディー」

特別インタビュー『間違いを恐れず努力し続ける!』

瓜生正美　聞き手 瀬戸山美咲

Contents

- 若手演出家コンクール2018 …… 2
- 若手演出家コンクール2017 最優秀賞受賞記念公演 …… 5
- 韓国現代戯曲リーディング Vol.9 …… 5
- 特別インタビュー 瓜生正美『間違いを恐れず努力し続ける!』聞き手：瀬戸山美咲 …… 6
- 演出家・俳優養成セミナー 演劇大学2018 …… 10
- 国際演劇交流セミナー2018 …… 11
- 日本の戯曲研修セミナー2018 …… 12
- 理事会報告 …… 13
- 部会だより …… 13
- アンケート「演出者の仕事」…… 14
- フェニックスプロジェクト Vol.9 …… 16
- 演出者と法律 …… 17
- ブロック紹介 …… 18
- 事業担当者名簿 …… 18
- 新入会員紹介 …… 19
- 退会・訃報 …… 19
- 続・台湾通信 …… 20
- 編集後記 …… 20

一般社団法人日本演出者協会 協会誌『D』（ディー）第22号 定価＝無料 2019年5月1日発行 2008年11月創刊（毎年2回発行）

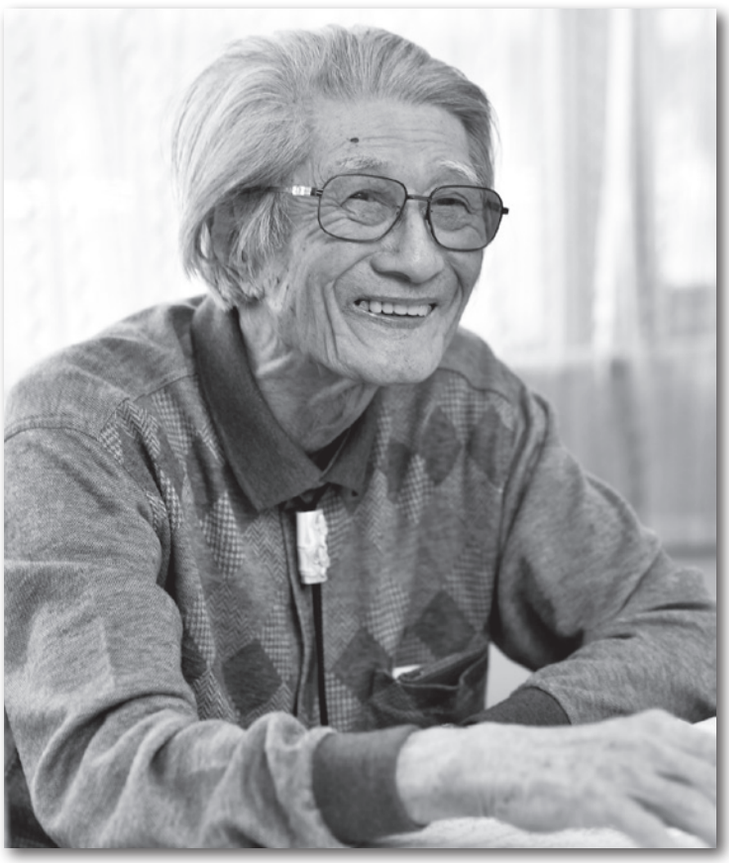
【発行人】流山児祥（理事長）【編集人】秋葉由美子（広報部長）／桒原秀一（副部長）／大西一郎（担当理事）【編集委員】篠﨑光正／緑川憲仁／藤間健／中村ノブアキ／五戸真理枝／冨士川正美／篠本賢一／野月敦／廣岡悠那【発行所】一般社団法人日本演出者協会 東京都新宿区西新宿6丁目12番30号芸能花伝舎3F（〒160−0023）電話03−5909−3074
【編集・制作】一般社団法人日本演出者協会広報部 協会誌『D』編集委員会【題字】千田是也『Marionetto』より【印刷所】有限会社一光堂印刷
【表紙デザイン】前嶋のの【表紙・インタビュー写真】ボクダ茂【インタビュー編集・本文デザイン】吉田奈穂

特別インタビュー 瓜生正美

間違いを恐れず努力し続ける！

令和元年を迎えた今号は、大正・昭和・平成と３つの時代を駆け抜けてきた現在９４歳の瓜生正美氏に特別インタビューを敢行。大病や戦争を経て、戦後すぐに劇団を立ち上げ、以来長年にわたって演出･脚本を手がけながらいくつもの劇団を率いてきた瓜生氏。その貴重な体験をうかがいました。聞き手は、瓜生氏が３３年間代表を務めた青年劇場で、２０１５年に『オールライト』の劇作、２０１７年に『梅子とよっちゃん』の演出を手がけた瀬戸山美咲さん。どんな話が飛び出したのか。ご期待ください。

聞き手：瀬戸山美咲
（取材：2019年3月27日）



瓜生正美（うりゅう まさみ）

１９２４年福岡県若松市（現・北九州市若松区）に生まれる。１９４４年学徒出陣で兵役に就く。戦後、土方与志に師事。１９６４年、「秋田雨雀・土方与志記念 青年劇場」創立。以来１９９７年まで劇団の代表を務めながら、『偽原始人（原作:井上ひさし)』『シシとササの伝説』等、青少年の問題と深く向き合った作品群を生みだしていく。代表作『青春の砦』は、青少年向け戯曲の名作として今も語り継がれる作品である。
（社）日本劇団協議会会長、日本演出者協会理事長を歴任。現、青年劇場、（公）日本劇団協議会顧問。

演劇の原点は高校時代にあった 高校から軍隊へ、そして敗戦へ

瀬戸山　瓜生さんが演劇を始めたきっかけは何ですか？

瓜生　僕は今まで兵隊に行って帰ってきてから演劇を始めたと思っていたんだけれど、この企画をもらって思い出したんです、高校時代にきっかけがあったことを。僕は五高（熊本にあった旧制第五高等学校）にいた頃、５歳の頃から剣道をやっていたから剣道部と、もう一つ、中学の先輩方に誘われて学校公認ではない文芸部もどきの会にも入っていたんです。五高時代、1年のときは寮生活をしていて、2年目に寮を出て白川にかかる子飼橋（こがいばし）近くの剣道部の下宿に移ったんです。その近くに若松中学の先輩方が下宿していてそこに集まってました。先輩方は文学青年でね。

瀬戸山　そこで芝居をやっていたんですか？

瓜生　芝居は上演しなかったけど、本の読み合わせをしたりする読書会、まぁ戯曲研究会みたいなもんだね。喜んで入ったわけじゃなかったけど（笑）、それが何となく芝居に関わる始めになるのかなぁ。

瀬戸山　原点は高校時代にあったわけですね。それまでは演劇に関わる環境はなかったんですか。

瓜生　全然！ 軍国少年ですから(笑)。そりゃぁもう3つ4つの頃から天皇陛下の御為に喜んで死ぬことを教えられて育ったんだから。「大日本大日本、我ら国民6千万は、天皇陛下を神とも仰ぎ、親とも慕いてお慕い申す」っていうのが修身（当時の道徳教育）にあるんだよ。

瀬戸山　召集令状が来たときは二十歳ぐらいですか？

瓜生　それまではね、大学に行っていたりすると徴兵猶予があって、満25歳までは兵隊に行かなくて済んだんです。ところが戦局が思わしくなくなって、１９４３年に学徒出陣が始まり徴兵猶予が一切なくなった。文科系の学生だけね。理系の学生は兵隊に行かなくても軍需産業などに使い道があるから。僕は１９４１年に第五高等学校に入ったけれど、結核で休学したりなんかしたんですよ。当時は結核が流行っていた頃でね、今はいい薬があるからなんてことはないんだけど、死病の時代ですから。結核で1年間休学して英彦山（ひこさん）にこもって治療しました。僕は今は痩せてる

けど割とがっちりしてて治りが早くてね、お医者さんにもほぼ大丈夫と言われて英彦山にあるスキー場に行ったんです。初めてなのに直滑降して、あれよあれよという間に岩にぶつかって……。

一同　えぇ～っ!?

瓜生　打撲性肋膜（胸膜）炎で小倉の市民病院に運ばれたの。そのときに徴兵検査の通知が来たんです。院長さんに「私が証明書を書くから延期を願いなさい。また来年、元気になったら行けばいいんです」と忠告されたんだけど、熱は下がっていたし治ってると思うので徴兵検査を受けてきますって行ったんですよ。体格から言えば甲種合格だと思うんだけど、レントゲンを撮ればバレる（笑）。普通だったら丙種で来年受け直しになるはずだけど、僕は必ず軍隊に入る第一乙種になった。召集令状が来たのは１９４４年の暮れです。ちょうど正月休みで若松に帰っていたときだったから非常によく覚えています。それで１９４５年、敗戦の年の正月早々に入隊したんです。

瀬戸山　召集令状が来たらすぐに入隊なんですか？

瓜生　もう、すぐに入隊。一週間かな。正月に久留米の四十八連隊鶴丸隊に配属になりました。隊長の鶴丸さんは同郷の若松の人で、軍人ではなく鶴丸汽船という会社の専務さんだったかな。だから僕は軍隊では非常に楽をした（笑）。僕らは島原半島の西側にある橘湾の警備部隊で、大本営が敵の上陸もあり得ると判定したため、それに備える部隊だった。穴掘り部隊と言われてました。湾からすぐ山があり、敵は船で来て艦砲射撃で徹底してこちらを潰し、もう抵抗力がないと見定めたら上陸してくる。こちらはそれが分かっているから、山に何本も穴を掘って貫通させ、艦砲射撃の間は山の手前に隠れていて穴を通って迎撃する作戦。そのための穴をみんな掘りに行ってたの。僕は一人だけ事務所勤務だったから穴は掘らなかったけど、兵器係、食糧係、命令受領の係など全部一人でやりました。下士官がついてるんだけど、下士官も穴掘りに行ってるから（笑）。

中学時代の親友との再会がきっかけで、かもめ座、九州演劇連盟を次々立ち上げ、本格的な演劇人生へ。

瀬戸山　二十歳であらゆる業務を一人でやったんですか。

瓜生　僕は指揮班っていうところにいたから、戦争が始まると中隊長のすぐ下についていろいろな手配をする役でね。８月６日に広島に原爆が落ちて、９日に長崎に原爆が落ちて。長崎は近いから、指揮班の業務で救援隊を長崎に連れて行ったんです。僕は連れて行くだけだったんだけど、すぐ置いて帰るわけにいかないから一日だけ手伝った。放射能なんて知らないから、とにかく真新しい軍手だけ支給されて喜んで爆心地に行って、黒焦げの死体を手で掴んでトラックに積んでたんだ。一日だけでも落ちた翌日に爆心地に入っているから、僕は第二次被爆者なんですよ。戦後もかかりつけのお医者さんは結核より原爆の後遺症を心配していて、肉をもぎ取られて癌研に送られたの。要するに原爆の後遺症で癌になる可能性があったからね。僕は幸い結果はいつもマイナスで何ともなかったけれど。

瀬戸山　８月15日はどういう気持ちでしたか？

瓜生　まぁ泣いたりわめいたりする人もいたんでしょうね。僕は一区切りついたという感じだったですね、正直言って。泣いたりわめいたりは全くしなかった。どんどんどん負け戦が近付いて来ていたんだから。

瀬戸山　負け戦って分かってたんですか？

瓜生　分かってる分かってる。そりゃ口にしたら怒られるけど（笑）、相当の人は分かってたんじゃない？ 東京は爆撃されるし、原爆は落とされるし。一区切りついたとは思ったけど、ただ僕は敗戦事務をやったんですよ。みんなを無事に郷里に送り返すために。だから全部終了して若松に帰ったのは10月ぐらいでした。

瀬戸山　結構かかったんですね。

瓜生　僕はあの戦争を、大東亜民族解放の聖なる戦いだと思っていて、天皇陛下のために喜んで死のうと思った一青年だった。それが新聞やラジオの報道で、アジア侵略の戦争だと知ったときには本当に怒った！ 騙しやがったと。以後の70数年は、騙したやつへの戦いの人生ですよ。

断り切れず引き受けた通訳の仕事が軍資金に
火野葦平さんと出会い、劇団創立へ

瀬戸山　若松に帰ってすぐ学校に戻ったんですか？

瓜生　いやいや。それから幸か不幸か、僕はアメリカ兵の通訳をやることになるんです。福岡の芦屋にあった帝国陸軍航空部隊の飛行場がアメリカ軍に接収されて、アメリカの飛行隊が来たわけ。そこから一番近い女郎屋が中間町（なかま）（現・中間市）にあって、アメリカ兵が遊びに行くんだよ。父方の遠縁が中間の町長をしていて、そこから頼まれたんでしょう。僕の英語は、読み書きは普通か普通以上にできたけれども会話はほとんどダメだったんじゃないかなぁ。でも断り切れなくて引き受けました。

瀬戸山　女郎屋に行くアメリカ兵たちの通訳ですよね。とても気になります。

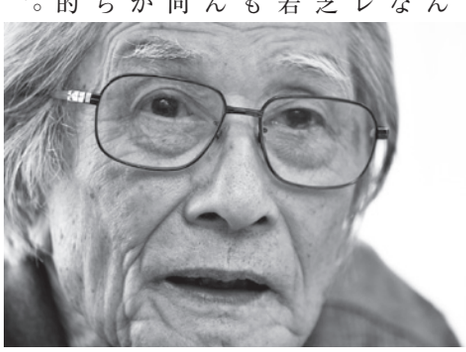
瓜生　それは相当高給でしたね。親父はどこかの会社の重役だったけれど、親父の何倍ももらってました（笑）。

瀬戸山　まだ学生ですよね？

瓜生　もちろん。大いに遊びましたよ（笑）。

瀬戸山　劇団はいつ頃始めたんですか？

瓜生　10月に若松に帰ってきて、１９４６年の正月ぐらいに、中学時代の親友の謝敷（じゃしき）というやつが家にたずねてきてね。そいつは東大生で、「土方与志を呼んでゴーリキーの『敵』っていうのをやってる。おもしろいぞ！ お前も演劇をやれ」と言うんですよ。若松では昔、火野葦平（あしへい）さんが実行委員長で『太陽のない街』という有名なプロレタリア演劇運動（※1）の芝居を呼んだことがある。若松は演劇の町だから僕にもやれと。その火野葦平さんや、火野さんの早稲田の同級生などと一緒に若松で「かもめ座」という劇団を立ち上げました。それが本格的な演劇生活の始まりですね。



※1　第１次大戦後に社会主義理論をその思想的裏付けとしながら、労働者、無産者階級およびそれを支持する知識人、文化人によって行われた演劇運動。

若松でかもめ座をやりながら、僕は九州大学に入ったの。九大に演劇部を作ったのは私（笑）。それから九演連、九州演劇連盟を福岡に作って、僕の構想では福岡だけじゃなく九州全体の組織にしようと思ったけど、そうはなかなかいかなかった。

瀬戸山　始めた瞬間にもう全てやってる！ すごいですね。

瓜生　結構忙しかった。若松でかもめ座をやり、福岡で九演連をやってね。そんなお金がなぜあったかと言うと、通訳をやってたから（笑）。

瀬戸山　なるほど！ かもめ座で演劇を始めたとき、瓜生さんは俳優をやっていたんですか？

瓜生　そうだねぇ、最初にかもめ座をやったとき……、一本は演出して一本は役者したなぁ。

瀬戸山　最初から演出を担当されるとは、ものすごいチャレンジ精神ですね！ 作品は？

瓜生　有島武郎の『ドモ又の死』でした。

土方与志さんに弟子入りし、大阪で初仕事
「芝居の話ばかりするな」の意味するところとは？

瀬戸山　土方与志さんにお会いしたのは１９４７年だそうですが、そのときはもう東京に来ていたんですか？

瓜生　いやいや、まだ九州でかもめ座や九演連をやってる頃に、土方さんが講演で九州に来たんですよ。確か新協劇団や文学座が九州公演に来始めたのが１９４７年。後に東京労演を作った皆川湜（あきら）さんが、炭鉱のオルグをするのに僕の家にひと月ほど泊まり込んでいて親しくなり、土方さんを紹介してくれたお陰で弟子になったんだ。僕は九州大学を中退して、１９４８年に土方与志が大阪で演出をした『ロミオとジュリエット』の演出助手についたの。それが最初の仕事ですね。公演期間は1ヵ月で、50から60ステージやったかな。昼は高校生に見せることが多かった。土方さんは演出が終わったらパーッと帰っちゃって、でも公演はそれから1ヵ月続くわけでしょう？ 毎日ちゃんと芝居を観てダメ出しの仕事をしたの。

人間は間違うもの。努力するやつは間違ってもまた努力して
乗り越えて進むことができる。間違ったらやり直せばいいんです。

瀬戸山　いきなり大役ですね！

瓜生　このとき初めて演出助手料をもらったんです。今でも記憶にあるけど、5万円もらったと思うんだ。当時は女房と子ども二人の家庭の平均賃金が1万3千何百円という時代だったんですよ。

瀬戸山　かなりの額ですね。芝居でそんなにもらえるなんて！ その後はずっと与志さんの演出助手を？

瓜生　僕はしばし大阪に残ったんです。大阪芸術劇場に請われて1年ぐらい仕事しました。その後、前進座の演出をしていた土方さんにそろそろ東京に出てこいと言われて上京し、１９５０年会というスタニスラフスキーの研究グループに参加しました。ちょうど共産党が分裂したり、前進座さんが劇団ぐるみで共産党に入った時代ですよ。前進座の演出助手をほぼ全部やっていました。前進座でもちゃんとした演出助手料をいただいていましたよ。大阪ほどではなかったですけど（笑）。その頃は、東京喜劇座という劇団もやっていて、いずみたくもいたんですよ。彼が役者を始めた頃。フランスの喜劇を翻案して『裸にされた所長さん』っていう作品をやりました。確かその頃忙しくて一晩で翻案したんじゃないかなぁ。

瀬戸山　筆が速くてうらやましいです（笑）。

瓜生　この頃は50年問題（※2）でゴタゴタして僕もちょっと嫌気が差しましてね、結核のこともあったし一時期若松に帰ったんです。土方与志さんも50年問題の最中だったから、若松に来て2～3ヵ月僕の家に泊まってた。そのときに火野葦平さんとも仲良くなって飲み歩いたり……そうだ！我が人生で一番たくさん飲んだのはそのときだ！

一同　（笑）！

瓜生　火野さんはビールしか飲まない人。土方さんは日本酒しか飲まない人、僕はどっちも飲む人（笑）。土曜日に稽古が終わって夜から飲み始めて、日曜日は24時間飲んだり寝たりしながら飲んで（笑）、月曜日の朝まで飲んだ。ビールケースが3つ、日本酒の一升瓶が10本は空いたと思うなぁ。眠くなったら寝て、また飲んで話して。これは土方与志の遺言の一つだけどね、「何でお前らは飲むと芝居の話しかしねぇんだ。他の話はねぇのか？」と。要するに、芝居だけやっていると視野が狭くなると。「一生懸命打ち込むのはいいけれど、輝くものにするためにはもっといろいろ知らなきゃ！ 人生を知らなきゃ。社会を知らなきゃ」それが僕が土方与志から教わったことです。

舞芸座分裂から青年劇場創立へ
言葉の言わんとする中身を伝えることが大切

瀬戸山　瓜生さんはその後一度演劇から離れたと耳にしたんですが、何をされていたんですか？

瓜生　五高時代の友人と貿易会社をやってました。当時は珍しい共産圏貿易をして、満州から大豆を輸入したり、中国の開灘炭（かいらんたん）やベトナムのホンゲイ炭を輸入してました。

瀬戸山　その時期は全く演劇はやらなかったんですか？

瓜生　全く止めてました。4～5年やったんじゃないかな。

瀬戸山　演劇に戻ってくるきっかけはあったんですか？

瓜生　１９５９年に土方さんが亡くなって、追悼公演の演出を僕がやったんです。舞芸座がまだあった頃で、その公演をきっかけに僕も舞芸座に入ったんだ。でも１９６３年には分裂してしまった。舞芸座の一部の人が、11歳年下の弟・良介が主宰を務める「発見の会」に参加したんだ。良介と僕の間には3つ年下の秀美がいるんだ。秀美は東大の人形劇団ポポロの創立者で、後にポポロ事件（※3）という有名な事件が起きるんだ。

瀬戸山　三兄弟全員演劇をやっていて、しかも考え方が違ったんですね。青年劇場は、それまでの舞芸座の路線を

※2　コミンフォルム（共産党・労働者党情報局）が日本共産党を批判したことをきっかけに日本共産党で起きた内部分裂。
※3　東京大学の学生団体「ポポロ劇団」が校内で公演中、私服警官が潜入しているのを学生が発見し取り押さえた際に学生が暴行を加えたと起訴される。警官の行為は学問の自由・大学の自治に対する侵害であるか否か、大学の自治が争点となった代表的な事件。

守りたい人たちが集まったという感じなんですか？

瓜生　いやいや僕が舞芸座が分裂して辞めていった人を呼び集めたんだ。僕自身、舞芸座ではいい代表ではなく分裂に追いやったという反省があったのでね。

瀬戸山　青年劇場を旗揚げしたとき、どういう劇団にしようと思っていたのですか？

瓜生　青年劇場は8人で作ったんだ。劇団名に「秋田雨雀・土方与志記念」と付くように、僕は舞芸座を復活したいと思ったの。舞芸座は秋田先生と土方先生が作った劇団だからね。でももう二度と舞芸座のブの字も聞きたくないという人もいたから「秋田雨雀・土方与志記念」という名前だけは付けようと言って出発したんです。

瀬戸山　青年劇場の第1回公演のシェイクスピア『真夏の夜の夢』から学校公演をたくさんおこなっていましたけど、それをやろうと思ったのはなぜですか？

瓜生　まず一つは、演劇で飯を食うため！ 僕は青年劇場を始めるときに最初に考えたのは「演劇で何とか飯を食いたい」ということでした。学校公演である程度力を付けて、市民劇場での公演も観に来てもらえるようになりたいと。フランスをはじめとする先進国の演劇人は、ちゃんと演劇で飯を食ってる。それは国の手当、補助ですよ。フランスの演劇人たちは1％委員会というのを作ってる。国家予算の1％を文化にと。その頃の日本は0．067％ぐらいで今やっと0．1％でしょう。劇団協議会にしても演出者協会にしても、規約の中に演劇環境を整えることが掲げられている。それは本当にそうだと思う。

瀬戸山　瓜生さんが演出をする上で気をつけていたこと、大事にしていたことって何ですか？

瓜生　これは誰に教わったのかなぁ……。要するに話劇だから、言葉がちゃんと伝わること。音として伝わるだけじゃなくて、言葉の言わんとする中身が伝わるためには、この台詞のどこに力点を置けばいいのか、短いフレーズでもそうだし全体的な流れの台詞の中で……というのは、演出としては当然考えますね。全体として伝えたいこと、戯曲の序破急なり起承転結なりの各部分が果たす役割みたいなことは演出家は当然考えにゃいかんでしょう。僕はそもそも演出からスタートして本を書くようになったから、逆に考えればいいわけです（笑）。

みんなの意見が集約されるような劇団でありたい
集団主義に徹したい。そのルールは多数決！

瀬戸山　劇団や集団のあり方が時代と共に変わってきているのではないかと思うのですが、長年劇団を率いていらっしゃった瓜生さんはどう感じていますか？

瓜生　変わってきているというか……僕が芝居を始めた頃は、集団には主宰者がいて、レパートリー選びなり何なり取り仕切る人がいたんですよ。相当な力量がある人ならばいいでしょうけど、僕は自分でそう思っていないから、劇団運営でも創造の面でも、みんなの意見が集約されるような劇団でありたいということは考えていたと思います。昔はよくケンカしたんですよ（笑）。でも大いにケンカし合えて、してもサッパリ後は忘れるような集団。集団主義に徹したいというのが僕の考え。集団主義の一つのルールっていうのは、多数決ですよ。でもね、多数決が必ずしも絶対に間違いがないとは限らない。間違うこともあるけれども、多数で決めるというルールを貫かない限り、多数者が間違ったことを変えていくこともできない、と僕は思います。僕が若かりし頃に好きだった言葉がゲーテの「ステルベンとストレイベン」。ステルベンは死ぬということ、ストレイベンは努力するという意味。要するに、人間は死ぬまで努力だ、でも努力する限り人間は間違うものだと。それはどういう意味かというと、努力しないやつは間違いもしない。もっと言うと、努力するやつは間違ってもまた努力してそれを乗り越えて進んでいくことができる！ 間違ったら直せばいいんです。大体70～80％この方向が間違いないと思えれば、後の20～30％は歩み出して努力する中で開けてきたり分かってきたりするもの。これ私の人生哲学です。

瀬戸山　最後に若手の演出家へメッセージをお願いしようと思ってたんですが、今の言葉をいただきます！ なんだかすごく、あぁそうだな、頑張ろうって思いました。集団を率いるのは難しいですけど、とにかく歩み出して、失敗したらやめる……ではなく、もう一回やってみればいいんだと。今日は長時間に渡って貴重なお話をありがとうございました。

瀬戸山美咲（せとやま みさき）
劇作家・演出家。1977年、東京都生まれ。2001年ミナモザを旗揚げ。2016年、『彼らの敵』で読売演劇大賞優秀作品賞受賞。劇団外の活動として『埒もなく汚れなく』『始まりのアンティゴネ』（ともに作・演出）、『オールライト』（作）、『梅子とよっちゃん』『ジハード―Djihad―』（ともに演出）などがある。2019年、『夜、ナク、鳥』『わたし、と戦争』で読売演劇大賞優秀演出家賞を受賞。